

開催にあたって

古くから物流の道であった瀬戸内地域は、江戸時代には西廻り航路の寄港地として発展していきます。当時の航海は常に危険と隣り合わせで、多くの人々が遭難していたのにも関わらず、人々は一攫千金を夢見て、海へ繰り出して行きました。

実は安芸津もこの西廻り航路、とりわけ北前船と大きく関係しているのですが、そのことはあまり知られていません。安芸津の廻船業者は広島藩でも有数の船をもち、諸藩の米を江戸や大坂へ運ぶ業務を請け負う、あるいは全国をまたにかけて商売を行うなどして財を成しました。この請負は、藩が信頼のおける廻船業者のみにしか依頼しないものであり、安芸津の廻船業者の信頼度と実力が伺えます。

今回の企画展ではこの北前船を取り上げ、安芸津の歴史の一端に触れてまいります。どうぞごゆっくりご覧ください。

最後になりますが、この場を借りて、本ミニ企画展に多大なる御協力をいただいた広島県立歴史博物館、神戸大学海事博物館、福井県坂井市三国町のみくに龍翔館、大湊神社の皆様をはじめとする方々にお礼を申し上げます。

東広島市教育委員会

参考文献一覧

- ・『安芸津町史』（2011）
- ・加藤貞仁『動く総合商社 北前船』（2018）
- ・大成景俊『木谷村の神さま』（2006）
- ・『国史大辞典』
- ・『新詳日本史』（2006）
- ・安芸津のあゆみ研究会『善松漂流記』（2000）
- ・矢野吉治「日本遺産認定記念海事博物館企画展『和船の活躍した時代』」
『海事博物館研究年報 47』（2020）
- ・石井謙治『日本の船を復元する 古代から近世まで』（2002）
- ・『広島県史』近世 2（通史 4）（1984）
- ・『広島県大百科事典』（1982）
- ・昆政明「船絵馬に見る弁才船の帆走」『歴史と民俗 32』（2016）

1 江戸時代の物流

物流の要は“船”

江戸時代中期から明治時代の中頃は、陸での物の移動がまだ発展途上にあり
ました。そのため、地方のお米（年貢米など）や産物を大量に運ぶ方法は、船
による海路が主流でした。港から港へ旅客や貨物を運んで回る船を廻船とい
います。

この時代、主な海路として、津軽海峡から三陸（青森・岩手・宮城）・房総
（千葉等）の太平洋岸を通過して江戸に行き着く東廻り航路、江戸と上方（大
阪・関西地方）を結ぶ南海航路、そして西廻り航路がありました。

西廻り航路は蝦夷（北海道）から日本海と瀬戸内海を通過して上方まで結ぶ
海路です。風待ちや悪天候を避けることができる天然の良港に恵まれていたこ
とから比較的安全であり、大いに発展しました。

この海路で活躍した船が、北前船と呼ばれる廻船です。「北前」とは上方が
北陸など日本海沿岸の北国方面を指して言う名称であり、この地域の物資を運
んでくることに由来します。

江戸時代の主要な航路図

江戸時代の主要な航路を大まかに示して
います。廻船業者らは沖合を移動し、沿岸
の寄港地に入りながら航路を往復しまし
た。



きたまえぶね
北前船の商売

当時の廻船は商品を預かって運び、その運賃でもうけを得る方法が主流でした（樽廻船や菱垣廻船など）。生活必需品が十分に生産できなかった江戸に、上方の物資を運び、その運賃で稼いだのです。しかし、それでは商品を運んだ後の復路は何も積まずに帰ることとなり、片道の運賃でしか稼ぐことができませんでした。

これに対して北前船は、立ち寄った港で安いと思う品物があれば買い、船に積んでいるもので高く売れるものがあれば売るといふ、商売をしながら往復しました。これを買積船と言います。

北前船はいわゆる「千石船」＝「米を千石（150トン）運べる船」でものを運んで売買し、大坂と北海道を往復して千両ものもうけをあげることができました。今でいうと6000万～1億円の稼ぎです。

きたまえぶね
商品と文化を運ぶ北前船

北前船は様々な商品を運びもうけを得ましたが、それだけでなく文化も運びました。下の表は北前船が運んだ商品と、文化の交流の一例です。

調味料	砂糖 醤油 酢 味噌	工芸品	陶磁器 ひな人形 太鼓 木像	漆器 扇子 畳
お菓子	落雁（らくがん） 金平糖	調理具	すり鉢 鍋	
果物	ミカン 柿の実	材料	真綿 麻糸 藍玉	石灰 材木 板
食材	くず粉 茶葉 大豆 大麦 そうめん かつお節 シイタケ クジラ肉 米ぬか	そば粉 干しエビ わかめ こんにゃく玉 黒ゴマ	日用品	飯わっぱ（弁当箱） ろうそく 菜種油 布団 刃物 煙草 燃料の薪 傘
文化	昆布（北海道→西日本）西日本での和食の基礎に 九州のハイヤ節→新潟県の佐渡おけさ、青森の津軽アイヤ節 島根の出雲節→秋田船方節			

※加藤貞仁『動く総合商社 北前船』（2018）を参考に作成

3 北前船の主力 弁才船

画期的な弁才船

弁才船は元々瀬戸内地方で発達した船型です。船体が丈夫なのに加え、鋭い船首で波を切り裂き、スムーズに進めました。何より一番の特徴は、逆風でも帆だけで進むことが可能な優れた帆走性能にありました。これは造船技術の発展や、廻船業者が人件費を削減しようとしたこと、帆に筵よりも操作のしやすい綿を採用したことが相まって実現したものでした。

この帆は綿布1反(幅 75cm ほど)をつなぎ合わせて作られました。船の大きさによって必要な帆の大きさが決まっていたので、この反数で船のだいたいの大きさが分かります(下記表を参照)。しかし、当初の木綿帆は手間がかかる割にあまり丈夫ではありませんでした。この欠点を解決したのが播磨(兵庫)の船頭工楽松右衛門で、試行錯誤の末、帆布用の太い糸を考案しました。この糸で織った帆布は瞬く間に普及し、明治まで使われました。

実績石数	帆の反数			乗組水主
	前期	後期	末期北前形	
100	7	10	11	3
200	10	14	14	4
300	12	16	16	4~5
400	14	17	17	5~7
500	16	18	18	5~9
600	17	19	19	6~11
700	18	20	20	7~13
800	19	21	21	8~14
900	20	22	22	9~15
1000	21	23	23	10~16
1200	23	24	24	12~18
1400	25	25	25	13~19
1500	26	26	26	13~20
1700	-	27	27	14~21
1900	-	28	28	15~22
2000	-	29	29	16~23

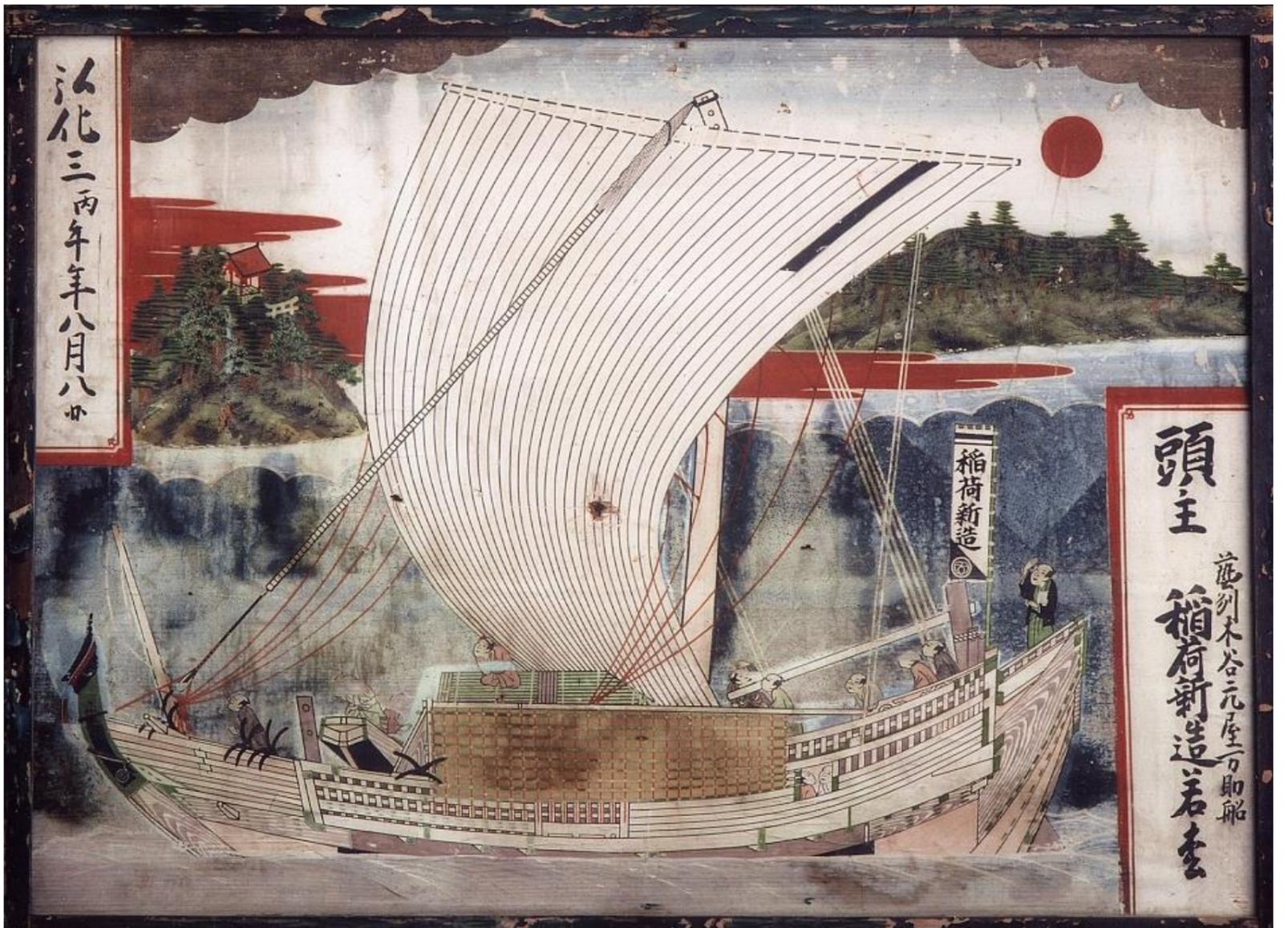
↑ 弁才船の積石数と帆の反数・乗組水主数の関係

※石井謙治「日本の船を復元するー古代から中世までー」(2002)を参考に作成

4 船絵馬の世界

いたご “板子一枚下は地獄”

いっかくせんきん
一攫千金を夢見て多くの人々が航海に乗り出しましたが、一方で「いたご
一枚下は地獄」と言われるように、航海は常に危険と隣り合わせでした。その
ため、かいせんぎょうしゃ 廻船業者らは寺社にあんぜんきがん 安全祈願のためのきしん 寄進をしました。その最たる例
がふなえま 船絵馬です。



絵馬：いなりしんぞう 稲荷新造

もとやまんすけ
安芸津の元屋万助の船 いなりしんぞう 稲荷新造のせんどう 船頭若松が、こうか 弘化3年(1846)
におおみなとじんじゃ 福井県の大湊神社にほうのう 奉納したものです。この絵から帆は30反帆、
乗組員が10名程度いることが分かります。

※みくに龍翔館所蔵

海の道、瀬戸内海

瀬戸内海は古くから様々な官船・漁船・商船が行き交い、人の移動や物の交換・売買が盛んに行われてきた、いわば「海の道」でした。江戸時代は西廻り航路の発展の中で、海沿いの地域が経由地として発展していきます。

海運で発展する安芸津

ここで安芸津に目を向けてみましょう。当時の史料を見てみると、天保12年(1841)の木谷村には1~7反数の船が30艘、21反数以上の船が5艘ありました。この5艘がいわゆる千石船です。『芸藩通史』は木谷村を1300石以上の船を持つ村として挙げており、広島藩でも最大級の船を持つ村だったので、この木谷村の船が、各地の港に出入りしていたことが記録されており、全国的に海運業(船で人や物を運び、もうけを得る)を行っていたことが伺えます。その記録を、地図で追ってみましょう。

出雲崎 (新潟県)

客船帳(廻船問屋の取引相手の船の出入り記録簿)

- ・三津浦の吉宝丸が1861年に入船し、干鰯を購入した。
- ・三津浦の吉日丸が1869年に入船。

輪島 (石川県)

客船帳に木谷村の元屋六兵衛の船11艘が記録されている。

他にも木谷村の船13艘や三津の嘉登屋(角屋)記録あり。

石見 (島根)

木谷の元屋万助の船が石見の御城米を江戸へ運ぶよう注文を受けた記録あり。

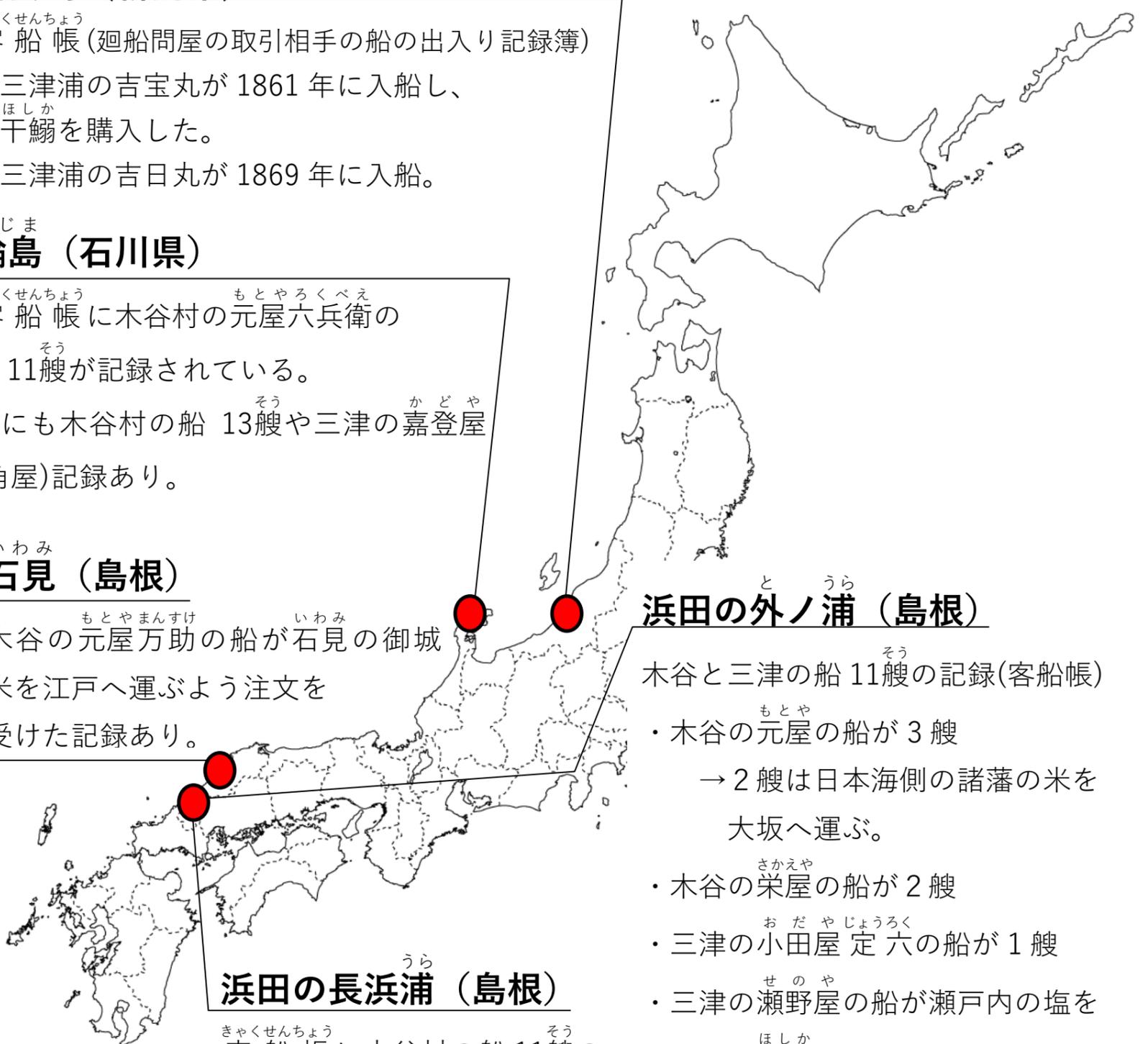
浜田の外ノ浦 (島根)

木谷と三津の船11艘の記録(客船帳)

- ・木谷の元屋の船が3艘
→2艘は日本海側の諸藩の米を大坂へ運ぶ。
- ・木谷の栄屋の船が2艘
- ・三津の小田屋定六の船が1艘
- ・三津の瀬野屋の船が瀬戸内の塩を売り、干鰯を買い入れて出港。

浜田の長浜浦 (島根)

客船帳に木谷村の船11艘の記録あり。



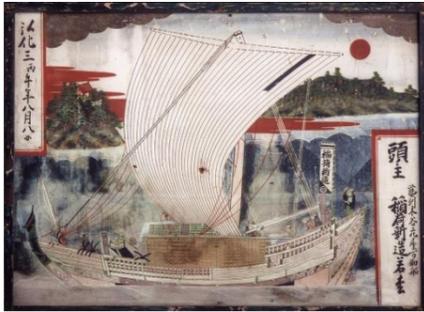
6 安芸津の廻船業者 全国へ②

安芸津の廻船業者、元屋・栄屋

安芸津の代表的な廻船業者が、日本海沿岸各地の記録に出てきた元屋と栄屋です。その経営規模などの詳細は不明ですが、少ない資料を見る限り、様々な藩の年貢米を藩の代わりに運ぶ、場合によっては売ったり、瀬戸内の塩を日本海沿岸で売ったり、綿などの商品作物が広まる中で必要とする人が増えた肥料の干鰯を、日本海沿岸で安く仕入れて瀬戸内で高く売ったりすることでもうけを得ていたようです。その繁盛ぶりは、元屋と栄屋が全国各地や安芸津で寄進(神社やお寺への寄附)を行っていることから伺えます。ここからは全国各地と安芸津での寄進の跡を追ってみましょう。

福井県坂井市大湊神社(1846)

元屋万助の船「稻荷新造」の船頭若松が船絵馬を奉納。



尾道市天寧寺(1828~)

光保万助が五百羅漢を奉納。

呉市豊町御手洗波止鎮守社住吉大神宮(1830)

元屋・栄屋が玉垣(神社の周囲に巡らせる垣)の親柱と子柱を奉納。



大阪市住吉神社(1821)

元屋・栄屋らが、海上安全の住吉神社の常夜灯を奉納。



※白地図は CraftMAP を利用して作成

安芸津の北前船 MAP～三津～

7 安芸津に残る北前船の跡①



①		<p>ちょうずばち さかきやまはちまんじんじゃ 手水鉢(榊山八幡神社) <small>しょうとく</small> 正徳6年(1716)に寄進されもので「讃州通船仲間」と彫られています。詳細は不明ですが、当時海運業で大きな力を持った讃岐の廻船業者<small>さぬき かいせん ぎょうしゃ きしん</small>の寄進の可能性が指摘されています。</p>
		<p>ふな え ま さかきやまはちまんじんじゃ 船絵馬(榊山八幡神社) <small>まんえん</small> 万延2年(1861)に伊勢丸の北瀬という人物が寄進したものです。19反帆の船と乗組員6人が描かれています。</p>
		<p>いしとうろう さかきやまはちまんじんじゃ 石灯籠(榊山八幡神社) <small>ぶんきゅう おだ やじょうろく きしん</small> 文久元年(1861)に小田屋定六が寄進したものです。小田屋定六は嘉永6年(1853)に、浜田の外ノ浦(島根)へ船が入った記録があります。</p>
②		<p>いしぶたね ふくじゆいん 石柱(福寿院) <small>さかきやまはちまんじんじゃ ちょうずばち</small> 榊山八幡神社の手水鉢と同じく、「讃州通船仲間」と彫られています。</p>
③		<p>ちょうずばち しょうふくじ 手水鉢(正福寺) <small>かんぼう きしん</small> 寛保元年(1741)に寄進されたものです。「高松通船仲間」と彫られており、詳細は不明ですが、高松の廻船業者が寄進したものである可能性があります。</p>

安芸津の北前船 MAP～木谷 1～

8 安芸津に残る北前船の跡②



<p>4</p>		<p>くもげ じぞうぼさつ 雲下の地蔵菩薩 もとや いしぞうじぞうぼさつぎぞう 元屋が造立した、海上安全の石造地蔵菩薩坐像です。</p>
<p>5</p>		<p>こまいぬ いしとうろう ちょうずばち しげまつじんじゃ 狛犬、石灯笼、手水鉢(重松神社) こまいぬ てんぼう ふなもち 狛犬は天保 1 2 年(1841)に木谷村の船持 1 7 名 他が、石灯笼は弘化 3 年(1846)に元屋万助が、 手水鉢は安政 3 年(1856)に栄屋作蔵が寄進した ものです。</p>
<p>6</p>		<p>もとや みつやす 元屋(光保家)跡 屋敷跡に一部の建物と石垣が残っています。</p>
<p>7</p>		<p>とうの さこいなりじんじゃ 塔ノ迫稻荷神社 もとや しょうばいはんじょう きがん 元屋が建てた神社で、商売繁盛を祈願したものと推測されます。</p>

⑧以降は次のパネルへ

安芸津の北前船 MAP～木谷 2～ ※⑧～⑩の地図は前のパネルです。

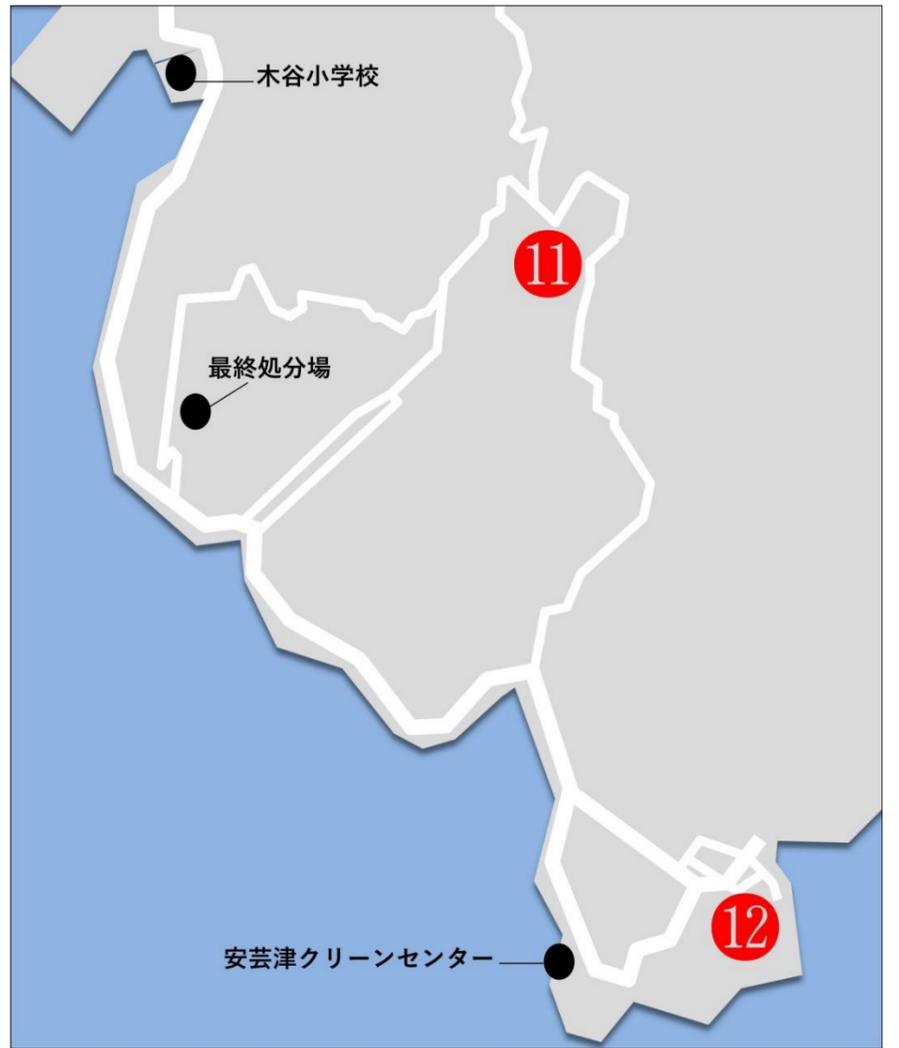
9 安芸津に残る北前船の跡 ③

8



やさかじんじゃ
鳥居(八坂神社/郷荒神社)

もとやまんすけ さかえやきゅうぞう
右柱は元屋万助、左柱は栄屋久蔵によるものです。安政3年(1856)に寄進されました。



9



こんびらしゃ けいじゆいん
金毘羅社(慶寿院)

けいだい こんびらしゃ もとやまんすけ さかえやきゅうぞう
境内社の金毘羅社は、元屋万助、栄屋久蔵、他
ふなもちこうじゅう ぶんせい きしん
船持講中が文政2年(1819)に寄進したものです

10



くり みょうせんじ
庫裏(妙専寺)

くり もとや
庫裏は、元屋の建物を移築したものです。

11



ほんでん ふねえま いたず どうろう さんしゅじんじゃ
本殿、船絵馬、板図、階段、灯笼(三種神社)

けいおう
船絵馬は4枚あり、うち1枚は慶応3年(1867)
もとや さかえや きしん いたず
に元屋と栄屋が寄進したものです。板図は同年
すみよしまる さくぞう きしん ほんでん
に住吉丸の作蔵が寄進しました。江戸期の本殿、
とうろう ふなもち きしん
階段、灯笼は船持等が寄進したものです。

12



とうろう とりい しおがまじんじゃ
灯笼・鳥居(塩竈神社)

ふたまで もとや
二馬手の塩田の守り神です。廻船業者の元屋・
かどや とうろう とりい
角屋が寄進した灯笼・鳥居が残っています。角屋
は石川県輪島に複数回入った記録が残る廻船
わじま かいせん
業者です。

10 善松ハワイ漂流記①

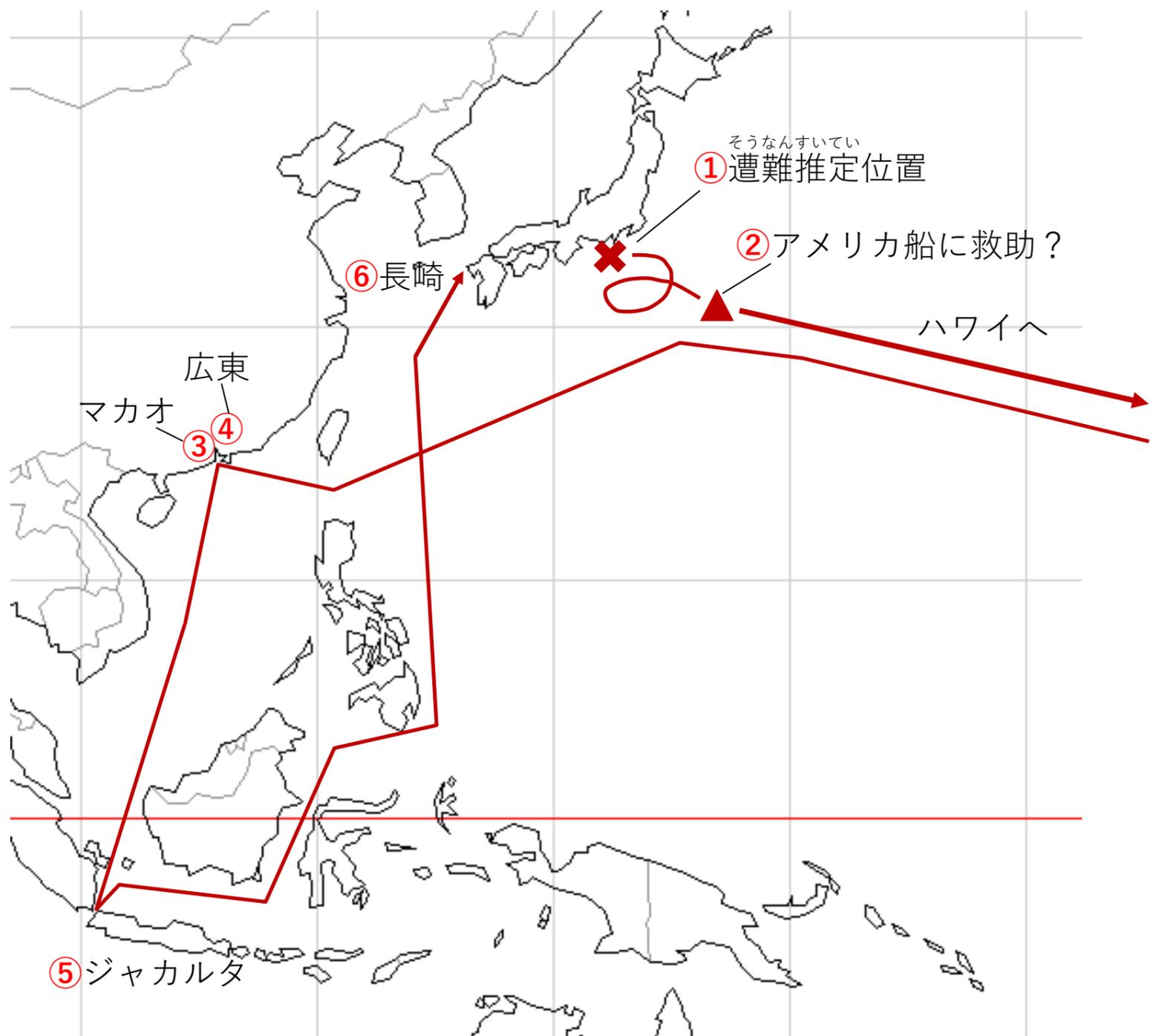
日本初 ハワイに上陸した男

弁才船が丈夫であっても、寺社に安全を祈っても、遭難する人は後を絶ちませんでした。その中には偶然外国に流れ着いたり、あるいは外国の船に救助されたりして、鎖国の世の中でも外国の文化に触れる人がいました。安芸津の元屋万助の船の乗組員、善松もその一人です。日本で初めてハワイに上陸したその経緯と結末を見てみましょう。

年	月	日		
文化2年(1805)	11	7	岩国藩(山口)の米を江戸に運ぶため稲若丸(500石積)で木谷を出発、岩国へ	
		15	岩国到着	
	12	21	江戸品川に到着	
		27	江戸品川を出発	
文化3年(1806)	1	6	①神奈川、浦賀、下田を経るも、悪天候で遠州灘で遭難(乗組員6人と岩国藩の役人2人)	
		28	糧米が切れる	
	3	20	②アメリカ船により救出	
		5	ワフ国(オアフ島)に到着	
	8	17	アメリカ船でワフ国を出発	
		17	③マカオに到着 船を改めた後、広東へ出発	
	12	20	④広東に到着	
		17	広東を出発…中国人に日本行きの船はないといわれたため	
	文化4年(1807)	1	24	③マカオに到着
			25	アメリカ船の船長の取り計らいで、ジャガタラ国(ジャカルタ)行きのマカオ船に乗る。
		2	21	⑤ジャカルタに到着
				飲料水の川の水にあたり、全員が病気を発症
4		20	王の招きで症状の軽い3人が城へ	
		28	乗組員1人と岩国藩の役人1人死亡	
5		15	長崎行きのおランダ船に乗船	
		16	乗組員が1人死亡	
6		17	長崎へ出発	
		3	乗組員1人と岩国藩の役人1人死亡	
文化5年(1808)		17		⑥長崎に到着→厳しい聞き取りを受ける(この聞き取り内容が『漂流記』になる)
	18		乗組員が1人死亡	
	22		乗組員が1人死亡	
		10	広島藩から善松引取りの役人等が長崎に到着 ※これより前に漂流中にキリスト教徒になった疑いがなさそうだということで、広島に戻ることを許される。ただし、藩外に住むことや出るとは禁止されている。	
	16		長崎を出発	
		26	広島に到着 ※藩にも藩外に住むことや出ること、さらに廻船業に従事することも禁止された。 村役人には善松や母の様子に変化が見られた場合はすぐに報告し、善松が死去した際は幕府に報告する必要があると伝えられる。	
	29		木谷村に到着	
		7	藩主斉賢の招きで城へ	
	6	29	善松病死(享年37歳)	

『安芸津町史』(2011年)を参考に作成

がいりやく
善松の辿った航路(推定概略図)



安芸津の歩み研究会『善松漂流記』(2000年)を参考に作成 白地図は CraftMAP を利用した。

乗組員が持ち帰った物

長崎などでの取り調べでは乗組員の持ち物についても詳細に記録しています。日本での乗船時に持ち込んだものと外国でもらったものを分けて書かれていました。

日本から持ち込んだもの				外国で手に入れたもの	
銀約1貫	木櫛	木綿わた入	木綿袋	紋形	木綿股引き
金約3両	たはこ入	木綿袷(あわせ)	紙入	簞印図	布帯
和銭約8貫	硯	木綿肌着	絹帯	横文字	はあか
浦賀御切手	方針	木綿袷羽織	青梅島袷羽織	横文字反古	根付
船切手	針	木綿はんてん	網肌着	唐銭約300文	真鍮ほたん
船印旗	箱	木綿夜着	呉羅帯	銀銭1文	箱
稻若丸額	珠数	木綿股引	縮緬ふくさ	銅銭1文	皮袋
伊勢袂	鋏(はさみ)	木綿蒲団	縮緬銭入袋	オランダ鋏	
札守	毛抜	木綿胸当	手貫	木箸	
銀札	小刀	木綿風呂敷	皮胴乱	船之絵図	
帖面	柳箆裏(やなぎごり)	木綿引解表	剃刀	唐地色木綿肌着	
書付	庖丁	木綿単帯		木綿手拭	

『安芸津町史(資料編)』(2011年)を参考に作成